

暗唱のすすめ 短歌二十五撰・夏の歌②

道のべに清水流るる柳陰

しばしとてこそ立ちどまりつれ

西行 法師

鬼灯を口にふくみて鳴らすごと  
蛙は鳴くも夏の浅夜を

長塚 節

夏のかぜ山よりきたり三百の  
牧の若馬耳ふかれけり

与謝野 晶子

向日葵は金の油を身にあびて  
ゆらりと高し日のちひささよ

前田 夕暮

鳴く蟬を手握りもちてその頭  
をりをり見つつ童走せくる

窪田 空穂